

日本がん疫学研究会

第14回IEA総会名古屋開催とIEA理事長に就任して

愛知県がんセンター青木國雄

Sydneyでの第13回国際疫学学会(IEA)の総会の選挙で、次の1996年の学会開催が名古屋市に決定した。この機会を逃すと当分は日本に出来ない見込みなので、思い切って立候補したこともあり、御支援賜ったIEA会員、関係各位に心から感謝申し上げる。IEAは疫学研究情報交換、研究の推進、疾病予防方法論とその効率化、疫学教育法の開発と普及などに長年努力してきている。次期学会にも全世界について各種問題を疫学面から明らかにし、地域保健医学の基礎科学として、いかに疫学が有用であるかを示してほしいなどの要望がある。

この学会総会で私はIEAの理事長にも選出されてしまった。これは学会を日本に持ってくるために有利とのことやREF重松逸造理事長(旧IEA理事)からのお勧めもあったからである。この日本人理事長選出も日本に寄せるIEAの期待が高く、たまたま代表として私に投票が集まったと考えている。歴代の力量のある理事長と比べ、私自身全世界の問題を取り扱うには基礎訓練のないのを嘆いているが、こうしたノウハウも後に伝えるべきものであろう。IEAでの6年間の理事生活、UICC(国際対がん連合)での8年間のプログラム委員長での経験を生かし何とか乗り切りたいと考えている。IEAの基本理念は公平公正とサービスであり、弱者への限らない支援である。これは私も昔からの日本人の心であり、そうした路線を歩むのはそんなに難しくない。しかし仕事は広範多岐であり、日本に寄せるIEA会員の期待も大きいので、一層の努力と共に今後引き続き先生方からアドバイスと支援をいただきながら万全を期したく、よろしくお願ひ申し上げる次第である。

IEA 第13回ISMに参加して

1993年9月26日から4日間AustraliaのSydneyで国際疫学学会(IEA)の第13回国際会議(ISM)が行われた。今回は、"New Pathways in Epidemiology"をテーマに、世界53か国、707人の疫学者が参加登録を行った。広々とした、伝統と趣を感じさせるSydney大学構内の13会場に分かれ、活発な討論が交わされた。日本からは、リストに記載されている者だけで67人が参加し、地元オーストラリアの319人に次いでの大人数であった。Sydneyに日本人観光客が多いこともあり、まるで国内学会に参加しているのかと錯覚する程であった。

もっともIEAの三役には柳川洋先生が会計担当理事としてIEAの財政面での管理と実質的役割を果たされているので、日本人参加者も大きな顔ができたからかもしれない。学会場で昼休みにポーとしていたら、本紙編集責任者の一人の徳留先生から、報告を書くようにとの指示を受け、「ポーとしていないで、少しは学会の内容も聞くように」とのお叱りの声と考え、お引き受けすることとした。しかし、学会の全内容を充分把握する時間がなかったので、少し偏った報告になることをお許し頂きたい。

今回の学会の特徴は「ウォルティングマチルダ」の国にふさわしく、全体として自由な感じのするものであった。そのためか、いつもはツアーに忙しい日本人参加者も会場に留まり、学会に「参加」している人が多く、また口演に多くの日本人が発表したことも特徴であった。癌の疫学研究についての研究は、口演28題、示説10題の発表がなされ、IsraelのKibbutzimの住民のcancer screening、prevention activityの報告、Indiaのvegetarianの胃癌のcase-controlの報告など、興味をひく内容のものが多く報告された。

学術的な内容についての報告はこの位にして、今回は日本人に関係して、いくつかの重大な決定がなされた。その始めは、9月27日の夕方6:00から8:00まで行われた第1回目のbusiness meetingで、前学会長であるW.Holland博士からJohn Last博士とともに重松逸造先生が、名誉会員になられたことが報告されたことである。これは先生のこれまでのIEAに対する種々の面からの貢献に対して送られたものである。9月30日に行われた第2回目のbusiness meetingは、さながらJapan dayであった。選挙の結果、青木國雄先生が、Roger Detels前理事長に次いでIEAの理事長に、田中平三先生が柳川洋先生の後を受け会計担当理事に選出され、三役のうち2つを日本人が占めることとなった。また、1996年に行う予定の第14回ISMは、国内学会であるJEAの活動内容、1991年に名古屋で行われたアジア地域会議での成果、IEAに対する貢献度等種々の面から検討がなされ、投票の結果、名古屋で青木國雄先生を学会長として開催することに決定がなされた。これは立候補した6つ地域の中で最後まで残ったオランダのハーグと日本との熾烈な宣伝合戦の末に、投票で決まったものである。現在のところ、この学会は名古屋で1996年8月に行れる予定である。

(愛知医大公衆衛生 佐々木隆一郎)



Waltzing Matilda

Once a jolly swagman camped by a billabong,
Under the shade of a coolibah tree,
And he sang as he watched and waited till his billy boiled,
You'll come a waltzing matilda with me.

Waltzing matilda, waltzing matilda,
You'll come a waltzing matilda with me,
And he sang as he watched and waited till his billy boiled,
You'll come a waltzing matilda with me.

Down came a jumbuck to drink at that billabong
Up jumped the swagman and grabbed him with glee,
And he sang as he shoved that jumbuck in his tuckerbag,
You'll come a waltzing matilda with me.

Waltzing matilda, waltzing matilda,
You'll come a waltzing matilda with me,
And he sang as he shoved that jumbuck in his tuckerbag,
You'll come a waltzing matilda with me.

Up rode the squatter mounted on his thoroughbred,
Down came the troopers, one, two, three,
Whose that jolly jumbuck you've got in your tuckerbag,
You'll come a waltzing matilda with me.

Up jumped the swagman and jumped into the billabong,
You'll never take me alive said he,
And his ghost may be heard as you pass by that billabong,
You'll come a waltzing matilda with me.

Waltzing matilda, waltzing matilda,
You'll come a waltzing matilda with me,
And his ghost may be heard as you pass by that billabong,
You'll come a waltzing matilda with me.

Repeat

左：読売新聞（平成5年11月3日朝刊）に掲載された関連ニュースのコピー

「国際疫学学会」96年に名古屋開催

世界の健康を考える場に

学会長の青木・愛知県がんセンター総長に聞く

国際疫学学会が、三年後の一九九六年に名古屋で開催されることが決まった。日本はもちろん、アジアでも初めての開催だけに関係者の関心は高い。国際疫学学会理事長で、名古屋での学会長を務めることになった愛知県がんセンターの青木国雄総長に、抱負や意義を聞いた。

（聞き手 報道部 片岡太）

——国際疫学学会とは。
青木 今日、疫学の基礎を築いた一人でもある英國の疫学者、ジョン・ペンバートンらが提唱し、一九五四年に組織化されました。

——第一回の学会はどこで開催されたのですか。
青木 一九五七年のオランダが最初です。

——国際疫学学会の目的は。
青木 これまで北欧を中心として、アジアでは初めてです。

——アジア開催は初めてですか。
青木 これまで北欧を中心として、アジアでは初めてです。

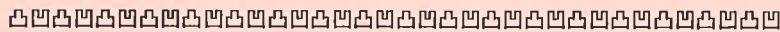


青木国雄・愛知県がんセンター総長

などを中心に開催されています。名古屋開催の決め手になった要因は、青木 日本、日本の疫学研究の

——疫学の重要性をわかりやすく言うと。
青木 疫学の研究なくして医学の進歩はない、といっているほど疫学は重要な学問なのです。特に、長寿社会を迎え、効率的な医療や予防が重要視されており、これからますますその役割は大切になってくるでしょう。国際疫学学会では、世界の健康問題と、疫学の役割をメインテーマにしたと本格準備に入っています。

レベルがアップし、世界的に評価されたこと、開発途上国への支援要請があります。それに、がんセンター、名大、名古屋市、岐阜大、愛知医大など東海地方には国際的にも人材が数多くいます。いまや東海地方は、日本の疫学研究のメッカとなっており、名古屋開催はそうしたことが国際的に支持を得た結果ではないかと思っています。



凸凸編集後記

第13回IEA学術会議への途上のことである。9月24日早朝、ケアンズ空港待合室はテレビの衛生中継にどーっと沸いた。サマランチIOC会長が2000年オリンピック開催地を「City of Sydney」と発表したからだ。その夜は遅くまで、シドニーのホテル近くのサーキュラーキー（埠頭）ではオージーが狂気乱舞し、IEA学会期間中もシドニー市民は「やっただぜ」（We did it!!!）と浮かれていた。

私達にも喜ばしく誇らしいビッグニュースがある。それはこの度、青木国雄先生がIEA理事長と次期学会長に就任されたことだ。ご多忙中にも拘らず、青木先生には就任の抱負を語っていただいた。それに読売新聞のインタビュー記事を加えて、この特集号とした。

IEA学会と総会記事は佐々木隆一郎先生の報告に詳しい

が、総会での選挙に関する私の印象を一言述べる。IEA理事長選挙では青木先生が対立候補に大差をつけて選ばれた。しかし、次期学会開催地選挙では、理事会段階で落選したカナダの代表が、選考七基準の一つに異議をとなえ、会場は一時不穏な空気に包まれた。そのような雰囲気の中での投票だったので不安がよぎったが、ほぼ当初の票読み通り、名古屋がオランダのハーグを押さえて選出された。

青木IEA理事長・次期学会長、日本疫学会、日本がん疫学研究会に対して、IEAと世界のIEAメンバーから大きな期待が寄せられている。私達の責務は疫学研究・活動に一層精進するとともに、青木先生のもと結集・協力して、有意義な第14回IEA学術会議を開催することであろう。（ST）

発行

日本がん疫学研究会

事務局

〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111 FAX: 052-763-5233
振込口座 名古屋1-37001

編集責任者

徳留信寛
田島和雄